

Title	『長町女腹切』試考
Author(s)	正木, ゆみ
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1996, 30, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47868
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『長町女腹切』試考

正 木 ゆ み

『長町女腹切』（以下『女腹切』）は、正徳二年秋に大坂竹本座で初演された近松の世話浄瑠璃である。本作では、京都の刀屋に奉公する若者半七が、強欲な継父に年の切増しを強要されている馴染みの女郎井筒屋のお花を救う二十両をととのえるため、拵えを依頼された名刀信国を安物にすりかえるという罪を犯す。が、半七に刀の拵えを依頼した、大坂長町で伽羅細工屋を営んでいる叔母が、その悪事も、もと武家であった叔母と半七の一家に伝わる信国の三代にわたる祟りのせいとし、半七の罪を全て負い、「女なれども武士の切腹」をして、半七とお花を救う。叔母の切腹という衝撃的な事件をもって終局を遂げる本作は、愛し合う若い男女の死で締めくくられることの多い近松の世話浄瑠璃の中では、特異な位置を占めているといえよう。

さて、『女腹切』は、大坂長町で起こった女の腹切り事件と、京都で起こった半七お花の心中事件をとりまぜて劇化したものとされているが、このように二つの別々の事件をとりまぜて劇化したことから生じる主題の分裂が、

従来、問題とされてきた。たとえば、広末保氏は、『女腹切』の主題を半七お花の悲劇としてとらえられ、二人の悲劇が十分な消化を見ないままに、下巻に至って、叔母の切腹という悲劇が展開したことに對し、「従属的な悲劇がいつの間にか半七お花の悲劇にとって変り、その従属的な位置から中心的な位置に乗りかわっている（中略）その結果また、半七お花の悲劇は帰結をもたない。（中略）悲劇としては、主題の入れ替りによって中絶した、未完結な作品と言わざるをえない。」と述べられている。⁽³⁾

これに對し、須山章信氏は、「基本的な悲劇を展開させるその担い手である半七の行為のうち、もっとも重要な意味を持つ「脇差のすりかえ」の場が、全く描出されていない」ことに着目され、広末氏の見解に疑問を呈された。そして、お花との愛に生きようとする半七と、半七に「侍筋」として相應しい出世を一途に願う叔母との心理的齟齬に注目されつつ、本作の劇展開をたどられることで、半七お花の「劇的役割は、あくまで叔母の「侍筋」の誇りを護らんとするために生ずる悲劇を全曲の頂点とするための準備的性格のものであった。（中略）近松の意図した主題は、「侍筋」であることを誇示せねばならない立場に立たされた人間の問題を描くことにあったのである。」と結論づけられた。

以上のように、『女腹切』の主題をめぐる二つの対立した見解が出されてきた。しかしながら、ここで問題にすべきは、『女腹切』の主題が半七お花の悲劇と叔母の悲劇のいずれに存するかということではなく、なぜ、正徳二年という時期に近松は、半七お花の悲劇を中絶させてまで、敢えて、須山氏のいわれる「侍筋」を誇示せねばならない立場に立たされた「叔母の切腹を舞台にのせようとしたのか、ということではないだろうか。本稿では、この疑問に對する一つの仮説を提示してみたいと思う。

前述のごとく、『女腹切』下巻では甥である半七の悪事を刀の祟りのせいとし、「侍筋」の誇りを守らんとする叔母が、半七の出世を願いつつ、切腹し、最期に喉の鎖りを突いて果てる。そのような叔母の行為に対し、近松は、「女なれども武士の切腹」、「男まさりの自害の体」、「女の腹切」といった表現によって、女ながら、武士の行為を果敢にも為遂げた叔母の気丈さを強調している。この叔母の切腹の趣向のもとなつたとされる、大坂長町での女の腹切り事件についても、半七お花の心中事件と同様、実説は不明とされている。⁽⁵⁾

さて、ここで指摘しておきたいのは、女の腹切り事件が、当時決して珍しいものではなかつたということである。尾張の藩士朝日文左衛門が記した日記『鸚鵡籠中記』（以下『籠中記』）を繙けば、宝永末〜正徳初年頃の記事の中に、貧窮などのために女性が切腹するという悲惨な事件を幾つか見いだすことができる。⁽⁶⁾ その内の一例を次に挙げておきたい。

今朝、御馬廻。高岳院大門前西南角中村牧右衛門、寢屋が起出る。あたりに人なき時。妻起て長持をあげ、守脇指を取出し、四歳の男子妻子に而一子なりを切る。此おとに牧右衛門駆付、蚊屋の内へ入り子を抱取退間に、女房自殺死。子は所々被切たれ共不死。妻腹を切、肛を突死す。妻は本多全休女にて、松井角左衛門と相舞也。牧右衛門極貧也。度々妻を以て助を求む。頃日も亦来り、全休は金持といへ共、度々の事と云、且貧を懲さんため大に叱すと云。妻飯で、夫せつなさの余り、无頼と妻を恨む。妻甚愁苦し終に乱心す。

(宝永七年五月二十五日の条。傍線筆者。以下同。)

極貧の夫への援助を実父に拒否された妻が、夫に恨まれたことを悲観して乱心し、子供に切り付け、自らは切腹に及び、『女腹切』の叔母と同様、喉を突いて果てたという記事である。このような時代的風潮の中、大坂の長町で同種の事件が起きていたとしても、決して不思議ではない。長町の裏町に、手内職の貧しい職人などが住んでいたことは、たとえば、『西鶴織留』(元禄七年刊)巻三の三「色は当座の無分別」において、遊女狂いで散財し零落した男が、「むかしは人を笑ひしが今身の上は長町にかけかくし。花火せんかうして朝夕の煙ほそくひとりの母に手なれぬ賃綿をくらし妹はわけもなき所へ奉公に出し」と描かれていることからもうかがえる。『女腹切』上巻で、叔母は半七とお花に「連合ひは大坂で伽羅屋といへば。町のよい衆屋敷方。人に知られて」と、夫の伽羅細工屋の甚五郎が、歴々の得意先から信望を集めていたことを語っている。が、一方、半七の叔母に変装して、半七の奉公先を訪ねたお花が、刀屋の主人に「主は細工の人宝貧な世帯の隙なしで。今日迄の御不沙汰」と語る。「細工貧乏人宝」や「貧乏暇なし」という諺を利用した台詞ではあるが、やはり、長町の伽羅細工屋には、貧しいという認識がつきまといっていたことを物語るものといえよう。

以上のことから、正徳二年当時、長町の貧しい伽羅細工屋で、先の『籠中記』の記事に見られたごとき状況での女の腹切り事件が実際に起こり、それを近松が浄瑠璃に仕組んだという可能性も、一応は認められる。しかしながら、その事件は、果たして、半七お花の悲劇を中絶させてまで、敢えて取り入れるほどの衝撃性を近松に対して与えたものであったのであろうか。前述のように、女の腹切り事件は当時珍しいものではなく、長町での事件も、数

ある事件の内の一つに過ぎなかったであろう。というのも、長町での事件が、当時衆目を集めたものであったならば、腹を切った女性の名前も喧伝され、当然浄瑠璃の中においても実名、あるいは、それを掠めた名前で登場する筈だからである。ところが、『女腹切』の叔母は、単に「半七叔母」「伽羅細工の甚五郎の内儀」とのみあるだけで、実際の事件を匂わせる要素がきわめて薄い。このことは、近松が「女の腹切」の趣向を仕組んだ直接的契機が、実際の事件以外のところに存したことを想像させるのではあるまいか。極端に言うならば、長町での女の腹切り事件は実際にはなかった可能性も、一方では想定されるのである。とすれば、近松は、頻繁に女の腹切り事件が起こるような時代的風潮を十分承知し、同種の事件が起こっても不思議ではない長町における女の腹切り事件を「仮構」⁽⁹⁾することによって、何らかの特別な意図をそこに込めようとしたのではないだろうか。

三

『女腹切』が初演された正徳二年の三月に刊行された、役者評判記『役者箱伝受』（以下『箱伝受』）の大坂の巻に載る女方津川半太夫の評判の一部を引く。

よほど久しい若女。十五年以前寅の霜月にお江戸山村座へ下られ。てるての姫と成美人の名を取明ル年勘三郎座の勤。鼻四の宮源八殿にほれられ。女の腹切大々当りほまれを取て。六年以前亥ノ十月ニ京万大夫座へ下りお上手の名を上。去々年もとの難波岩井座へ下られ。去年より嵐座つゞいて若女の立物。

傍線部に「女の腹切」という語が見えることに注目したい。津川半太夫が、「女の腹切」の演技で大当たりを取

ったのは、十三年前の、元禄十三年正月江戸中村座春狂言の『万年暦いなり山』（以下『いなり山』）の第三番目においてであった。『役者万年暦（江戸）』（元禄十三年三月刊）に拠れば、当該局面では、主君山科右大将から、源義親と周防内侍を討つことを命じられた家老なる瀬権の太夫（四の宮源八）は、息子大藤次（西村弥平次）の面前で、嫁（半太夫）に恋慕をしかける。夫への言い訳が立たない嫁は、腹を切って死ぬ。その後、権の太夫は、嫁を内侍の身代わりにするため、わざと恋慕したのだと心底を明かし、自らも切腹して義親の身代わり立つ。以上、所謂忠臣の悲劇の局面である。『箱伝受』江戸の巻では、舅権の太夫に扮した四の宮源八の評においても、この時の演技について「十三年以前辰の初狂言勘三郎座で。嫁のけわひに舅の白髭と云狂言。嫁ニ津川殿。舅なる瀬権の大夫則源八殿役ニて。嫁にほれかけ津川殿ニ女のはら切さるゝ芸。思ひ入有て御名人しらが似合ましたに。（以下略）」と回想している。

このように、正徳二年刊行の評判記で、大坂の女方津川半太夫が、かつて江戸において「女の腹切」の演技を見せた局面が好評を博したことが印象づけられているという事実と、同年秋に上演された『女腹切』に「女の腹切」の趣向が見えることは、単なる偶然の一致として看過してもよいのであろうか。注目すべきは、翌正徳三年四月刊行の『役者座振舞（坂）』に載る、半太夫と同じ津川姓の津川方大夫の評に、「津川半大夫殿は去年お果なされた一字ちがいのお名。半様のやうにほまれをとりたまへ」と記されていることである。すなわち、半大夫が、『箱伝受』の刊行された正徳二年三月以後、同年中に急死を遂げたことが知られるのである。この半太夫の急死と、近松の浄瑠璃『女腹切』とを結び付けて考えることはできないであらうか。

ここで、半太夫の江戸での芸歴及び芸風と、上方での人気程について簡略にまとめておきたい。半太夫は元来

大坂の役者で、鈴木平左衛門の抱え子として鈴木松之介と名乗り、初代岩井半四郎の舞台などに出演していたが、元禄十二年度江戸山村座に下り、津川半太夫と改名する。顔見せ『小栗七福神』の照手姫役で生島新五郎との濡れ事が好評を博す。元禄十三年度は中村座にて、前述の『いなり山』の「女の腹切」で大当たりを取る。元禄十四年度、同十五年度は山村座に帰参、同十六年度から宝永四年度まで市村座で勤め、京上り暇乞いの狂言『あいご恋の浮橋』の継母役を最後に、京都万太夫座に上る。⁽¹⁰⁾

江戸出勤中の半太夫は、天性の美貌を生かしたお姫様や御台役、あるいは、上方から江戸に下って活躍した名女方荻野沢之丞や袖崎哥流の影響を受けた女武道⁽¹¹⁾や、地狂言に長けた芸風を生かした忠臣の妻役をこなし、やがて、「今お江戸にて。指おりの女方になり給ふこと。大き成お手がら也。」(役者御前歌舞妓 江戸 元禄十六年三月刊 半太夫の条)と評されるに至るが、この年の江戸女方の中の順位は七位であり、決して高いものとはいえなかつた。これは、地狂言よりも、華やかな所作事を志向する江戸歌舞伎の気風の中、ともすれば、所作事を得意とする⁽¹²⁾女方に庄されがちであったためである。地狂言に長けた半太夫の芸風は、むしろ、上方で花開くものであった。彼が、宝永五年度上京した際の評判を次に引く。

此君を見やうばかりに。あけ六ツより芝居江入り。今や／＼とまでどくらせど御出なく。やう／＼二ばんめよりちらど見そめ参らせ候。先もつて都。初舞台のきみ。(中略)身をひかせられての口上。(中略)津かわさま半太夫さま。いや／＼どつとほむるこゑ。(中略)誠に此君。八九年比かた。江戸にての御しゆぎやう。まひ拍子所作事は申におよばず。武道のつめひらき地狂言何からなまでに。よくのみこみたまへば。おつ付上

吉の位にいたり給はん事。今の事なるべし。(中略) 江戸風の武道のたゞ中。歌流殿にいきうつし。(中略)
 此度都のあたり。お江戸に百ばい。(役者色将棋大全綱目 京宝永五年正月刊 半太夫の条)

半太夫の前評判を聞いての京都の観客たちの歓迎ぶりが、相当のものであったことが窺えよう。京都女方の中の順位は、中村千弥に次いで二位であった。江戸出勤中に比べると、格段の出世といえよう。翌宝永六年度は、京都早雲座に出勤。顔見せの『ゑびす講結御神』でのお乳の人滋の井役が大当たりを取る。当代随一の女方芳沢あやめに次いで二位の座を獲得している。⁽¹³⁾ 宝永七年度、彼は十二年ぶりで本拠地大坂岩井座に帰参する。この時は、市村玉柏の人気に庄されたようだが、「なじみがでけたらおそらく。あやめ殿におとる人では有まいと。我らは存るよ」(役者謀火燧 坂宝永七年三月刊 半太夫の条)と、大坂での活躍を期待され、やはりあやめに次いで二位である。宝永八(正徳元)年度は、大坂嵐三右衛門座に出勤。荻野八重桐、市村玉柏に次いで三位ではあるが、「当卯の顔みせ嵐座の若女の立物。女武道手ばしかく。(中略)八重桐より身は津川殿がすぐれたと存するよ」(役者大福帳 坂宝永八年三月刊 半太夫の条)と、やはり突出した女武道が高く評価されている。そして、翌正徳二年度も、嵐三右衛門座に出勤し、評判記の順位は前年と同じだが、この年の活躍次第で、拮抗している八重桐や玉柏を抜くことも期待されていた。⁽¹⁴⁾ そうした最中での急死であった。

半太夫は、伊原敏郎氏の『日本演劇史』(明治三十七年刊)に取り上げられていないためか、近代以降の演劇史においては、余り注目されることのなかった地味な女方であるが、如上の芸歴から、当時の上方における女武道の実力者としての地位は決して看過されるべきではなからう。⁽¹⁵⁾ 半太夫の急死は、上方の観客たちにとって、少なから

ぬ衝撃を与えたものと推測される。そして、その衝撃と共に、彼らの念頭に浮かんだのが、半太夫の「女の腹切」の大大たりを伝えた同年刊の『箱伝受』の記事ではなかったであろうか。『箱伝受』が、十三年前の「女の腹切」の大大たりについて言及したのは、その演技が、上方で好評を得ている半太夫の「江戸風の武道」を形成する重要な契機であったと見做したからであろう。そもそも、女方による切腹は、元禄歌舞伎において、余り試みられたことのないものである。江戸では、半太夫が「女の腹切」を見せた『いなり山』以前に、二例指摘できる程度であり、上方では、少なくとも半太夫が急死した正徳二年以前には、例を見ない。⁽¹⁷⁾ おそらく、美しさや気品を重んじる女方が、ややもすれば凄惨な印象を与える切腹を巧みに演じるためには、女武道における相当の技量が要求され、そのような技量を備えた女方が少なかつたためであろう。⁽¹⁸⁾ 従って、半太夫の「女の腹切」の大大たりを伝える『箱伝受』の記事は、女方としては異例のこととして、上方の観客の目を引き、上方の舞台においても、女武道で名を馳せている彼の面目躍如たる「女の腹切」が、近い内に披露されることを期待したのではないだろうか。しかし、その期待も、同年の彼の急死によって、挫かれてしまった。そのような観客たちの悲しみと落胆を察知した近松が、上方の歌舞伎の舞台ではついに実現されずに終わった半太夫の「女の腹切」を、おそらくは、その時構想していたであろう半七お花の物語に絡ませることによって、浄瑠璃の舞台に取り入れ、半太夫の急死を悼む上方の観客を慰めようとしたのが、同年秋上演の『女腹切』における叔母の切腹の趣向であったのではないだろうか。

四

前節で、『女腹切』における叔母の切腹の趣向が、同年急死を遂げた大坂の女方津川半太夫の、往年の当たり芸

を取り入れたものである可能性を提示した。本節では、その可能性を補強すべく、叔母の人物造形と、半太夫の出演歌舞伎とが関連を持つことを指摘してみたい。

『女腹切』上巻では、継父に強要されている年季切り増しの件で切羽詰まり、半七の叔母に変装して、半七の奉公先を訪ねるといった危険を犯したお花の捨て身の恋に対し、叔母が、涙ながら情愛深く意見する。この叔母の意見事は、本作中でも、特に著名な局面である。次に一部を引く。

色事は若い役此上にどのやうな。生きる死ぬるの場になりても。やくたいもない気をもつまいぞ。世間多い心中も銀と不孝に名を流し。恋で死ぬるは一人もない。流れの身には取り分けて。悲しいこと惨いこと。そこを死なぬが心中ぞや。真実男かはゆくは五度会ふものを三度会ひ。二度を一度になす時は親方も機嫌よく。恋に身を打つこともない。

さて、以上のごとき内容を備えた叔母の意見事の先例を、近松の世話浄瑠璃『心中重井筒』（宝永四年末頃 竹本座）中巻に求めることができる。妻子ある徳兵衛と愛し合う重井筒屋のおふさは、今晚金が調わねば、京の父親が、おふさを二重売りにした罪に問われ、また自らも徳兵衛と別れなければならぬことを嘆き、密かに自害しようとする。そこを、重井筒屋の内儀が見とがめ、涙ながらに、次のような親身の意見をする。

無下なふ堰くではなけれ共それにさへなを駆引有。必妻子有人と末の約束せぬ事ぞ。男の間男同前にて思ひばかりかぬ物ぞとよ。（中略）おたつ様を離別させ添ふてそなたの本望ならず。（中略）よい客もがな出世させ

下女の一人も連れさせたふ。思ふはこちとばかりかは皆親方は同じ事。訳もないこと仕出してむごい目見せてたもんなや。

半七の叔母と同様、ふさの命がけの恋を情愛深く戒めている。この重井筒屋内儀の意見事を、近松は、半七叔母の意見事として再現しているといえよう。意見事自体は、元禄歌舞伎の心中狂言の重要な趣向であり、その影響下にある近松の世話浄瑠璃にも、しばしば仕組まれ、類型化したものである。しかし、父親ゆえに想う男と添えず、窮地に立たされている遊女に対し、中年の女性が、廓での恋には駆け引きが必要であることを説いている点において、両作の意見事は近似していると思われる。このことを踏まえ、『心中重井筒』を歌舞伎化した『難波重井筒』（宝永五年 京 万太夫座）に、半太夫が出演しているという事実注目してみたい。本作の狂言本は役人替名を欠くが、挿絵の紋から、女方については、おふさに山本かもん、徳兵衛女房おたつに市村玉柏が扮したことが判明している。⁽²⁰⁾今一人の主要な女役たる、重井筒屋女房については不明である。が、この年万太夫座の女方の巻頭を飾るのは、『役者色将棋大全綱目（坂）』の目録に拠れば、津川半太夫であることが知られるので、半太夫が内儀に扮したと見て間違ひなからう。半太夫が意見事を得意としたことは、評判記に、「（前略）いにしへの引事云てのあけんのせりふ立役者も成まい。」（役者大福帳 坂 半太夫の条）とあることからわかる。以上の点から、半太夫が重井筒屋の内儀に扮して、浄瑠璃と同様の意見事を見せたと考えてよいのではないだろうか。⁽²¹⁾とすれば、下巻の「女の腹切」の趣向と同様、近松は上巻における叔母の意見事の局面でも、急死した半太夫が演じたと推測される、重井筒屋の内儀の意見事の再現を試みたという可能性が考えられよう。なお、下巻では、「生きる死ぬるの場になりて」

「やくたいもない気を」持った半七とお花の窮地を、叔母が自ら切腹することによって救っているのであり、上巻の叔母の意見事と、下巻の「女の腹切」の趣向とが、有機的に結び付けられている点も、注目に値する。

以上のような視点から半太夫の芸歴を眺めると、今一例看過できない役柄がある。それは、前節でも触れた『あびす講結御神』（以下『結御神』）でのお乳の人滋野井役である。『結御神』は、近松の世話浄瑠璃『丹波与作待夜小室節』（以下『小室節』）（宝永四年末 竹本座）を歌舞伎化したもので、狂言本も現存する。お乳の人滋野井役は、半太夫の前に、宝永五年秋大坂岩井座で芳沢あやめが扮して好評を博し、また、『結御神』での半太夫の当たりに刺激されて、再度あやめが、宝永六年中に京都布袋屋座で演じたものである。⁽²⁾『役者謀火燧（坂）』（あやめの条）には、半太夫の滋野井が、当代随一の女方あやめを凌駕する程の大き当たりを取ったことが記される。⁽²³⁾このことは、『女腹切』と半太夫の関連をたどる上で、示唆的である。というのは、『女腹切』の叔母と、『小室節』の滋野井の人物造形に類似性が認められるからである。

滋野井と、半七の叔母は、共に、当人の預かり知らぬ因果のために落ちぶれた生活を余儀なくされている侍筋の我が子や甥を哀れに思い、深い愛情を感じている女性として描かれている。半七の叔母は、「二親もない半七叔母一人甥一人。もとは知行も取つた筋職人の弟子と朽ち果つれど。可愛とも不便共思ふ者は此叔母一人。」（上巻）と半七とお花に語り、滋野井も馬子姿の三吉に対して「可愛のなりや痛々しや。千三百石の代取が何の罰ぞとがめぞ」（上巻）と言って嘆きに沈んでいる。そして、彼女たちの、我が子や甥に対する愛情が深い程、彼らが、侍筋たることを傷つけるような行為を犯した時の衝撃と立腹の度合いは強い。⁽²⁴⁾『小室節』中巻では、三吉が、与作に頼まれて盗みを犯し、捕らえられた局面では、「お姫様の乳兄弟馬方して盗みしてと。言はれんも口惜しく不便さ憎

さ腹立さ。(中略)筋目も有そな者なれ共さすが育ちが恥しい。」と、三吉の盗みを恥じる滋野井の姿が描かれる。また、『女腹切』下巻では、半七が、心中を決意し、お花を同道して長町の叔母を訪ねた局面において、叔母は、「こちの連合甚五郎殿は武士つきあひして堅い人。半七も侍筋行儀強い若い者と。常々自慢しておきしに。それにお山を同道し。初めて対面させられふか。(中略)大事の甥を連合に見限らするが口惜しい。」と、半七の遊女狂いを恥としている。しかし、滋野井も叔母も、結局は、我が子や甥の窮地を救うために心を砕く。滋野井は、三吉の助命に奔走し、叔母は、半七の罪を一身に引き受けて切腹する。

以上の類似性から、『女腹切』の叔母を造形するに際し、近松が先行作『小室節』の滋野井を強く意識していた可能性は高いと思われる。筆者は、その契機を、『小室節』を歌舞伎化した『結御神』において半太夫の滋野井役が、大当たりを取ったという事実に求めてみたいと思う。すなわち、前述の「女の腹切」や意見書の例を踏まえるならば、近松は、侍筋であることを誇示しつつ、半七への愛情を吐露する叔母を描くことで、半太夫が扮して大当たりを取った滋野井像の再現を試みようとしたのだと思われる。『小室節』における滋野井の、三吉を侍筋であることを強く意識して接する態度が、『女腹切』の叔母と半七との関係において再現され、それが、叔母の、半七を救う「女の腹切」を必然的に生み出す契機となっている。つまり、近松は、自作の浄瑠璃が歌舞伎化された際に半太夫が好演した女性像を取り込み、それらが、半太夫の大当たり芸である「女の腹切」に向けて収斂していくような形で、半七叔母の人物造形を行っていたという可能性が推測されよう。勿論、「女の腹切」以外の局面では、半太夫独自の個性を看取するのはやや難しいということは否定できないが、「女の腹切」と半太夫との関連に気がつけば、叔母の意見事に、『難波重井筒』での半太夫の意見事を、また「侍筋」であることを誇示せねばならない」

叔母の姿に、『結御神』の半太夫の滋野井役を思い出す観客もいたのではないだろうか。『女腹切』は、「はかなき命南無阿弥陀南無阿弥陀仏疑ひなき。西方極楽浄瑠璃に語りて哀れを止めける」と、叔母を悼む追善の文句で終わっている。本稿で述べたことが認められるならば、ここに、自作の浄瑠璃の歌舞伎化に際して重要な役を好演し、上方での今後の活躍を期待されていた折りに急死した、女武道の名人半太夫に対する近松の哀惜の情を読み取ることができよう。

以上『女腹切』の眼目ともいえる「女の腹切」の趣向を中心に、叔母の人物造形と、その年急死した女方津川半太夫との関連を指摘し、半七お花の心中の物語を中絶してまで、「女の腹切」を描こうとした近松の意図を探ってみた。しかしながら、半太夫の「女の腹切」の本当たりが十三年以前の江戸でのことであり、それに触れた『役者箱伝受』の記事がどれほど上方の観客にとって影響をもたらしたのか、また、半太夫が人氣急上昇中であつたといえ、急死した時点では筆頭ではなく、二番手にとどまっておリ、その死を当て込む意味がどの程度存したのか、⁽²⁶⁾ などという点について、未だ検討の余地は残されているよう。さらに、当時大坂の長町で女の切腹事件が起つたという可能性も、全く否定しすることはできない。このように、半太夫と『女腹切』を結ぶ決定的な証拠を発見できない限り、問題点が多いが、『女腹切』を契機として、隠れた名女方津川半太夫の一面に触れることができたことは幸いに思う。ひとまず本稿を仮説として提示し、後考を期したい。

注

(1) 中巻に見える金銀の相場に関する文辭と、歌舞伎役者の異動に関する文辭からの推定。黒木勘蔵氏編『近松名作集下』(日本名著全集 昭和二年)の解題など参照。

- (2) 鳥越文藏氏校注『近松門左衛門集 二』(小学館日本古典文学全集)の解題など参照。
- (3) 「主題の分裂について——『丹波与作待夜の小屋節』と『長町女腹切』——」(『増補近松序説』昭和三十八年)。
- (4) 『長町女腹切』小考(『青須我波良』十五号 昭和五十二年)。
- (5) 参考までに鶴見誠氏の説を引く。「女腹切りの実説については伝えるところがない。従って何もわからないけれども、しかしとにかく実際にあつた事を題材にして、近松が本曲を書いたに違いないと私は考える。そうでなければ、このような突飛な話を思いつく筈がないからである。」(『正本近松全集』第十三巻解題)。
- (6) 例の他に、宝永八年八月八日、正徳二年八月三日の条などに、女性が貧窮や姑との不和を悲観して切腹したという記事が見える。これらの記事については、神坂次郎氏『元禄御畳奉行の日記』(中公新書 昭和五十九年)参照。
- (7) 注(2)前掲書頭注参照。
- (8) 正徳三年九月刊中島又兵衛新板の浮世草子『西海太平記』巻三の三に、伏見に住む武家出身の女性が切腹する(実は家来の目を欺くための空腹)局面があり、「是を女の腹切と世の取沙汰と成けるが。」と記される。『女腹切』の初演時の翌年の刊行であり、『籠中記』に女の切腹事件の記事が見られる時期と重なっている点、留意される。
- (9) 『女腹切』は、実説が不明なため、世話浄瑠璃の中でも創作的要素の強い「仮構物」として分類されている。
- (10) 半太夫の上京以前の芸歴については、『役者謀火燵(坂)』(半太夫の条)などにまとめられている。
- (11) 井上伸子氏『江戸の女方』(『立教大学日本文学』四十号)、同氏『初代荻野八重桐とその時代の女方』(『近世文芸』三十五号)参照。
- (12) 『役者三世相(江戸)』(宝永二年四月刊)の半太夫の条では、小嶋平七を半太夫の上位においた理由として、平七が地狂言よりも所作事にすぐれている女方であることをあげている。
- (13) 『役者胎内搜(京)』(宝永六年三月刊)参照。
- (14) 『役者箱伝受(坂)』(半太夫の条)参照。
- (15) 劇書『役者全書』(安永三年五月刊)巻一の「元禄より享保までの上上吉の役者」の中に、半太夫の名前を見いだすことができ、近世における彼の評価は決して低くはなかったと思われる。
- (16) 『参会名護屋』(元禄十年 中村座)第三(女方 袖岡政之助)、『竜女三十二相』(元禄十一年 中村座)第二(女

方桐山政之助) など。

(17) 正徳二年以後では、享保十一年二月京都三保木座『契情伊勢物語』において、女方津川かもんが女の腹切の演技を見せている(『役者拳相撲(京)』(享保十一年三月刊 かもんの条)。半太夫と同じ津川姓であることから見て、彼の芸風を継承している女方であると推測される。

(18) 近松の時代浄瑠璃『日本振袖始』(享保三年二月 竹本座)第三に、夫の欲心も胎内の我が子ゆえと嘆く五百機が、鎌で腹を切り、胎内の子と共に果てるという「左鎌」の趣向が見えるが、本作が歌舞伎化(享保三年 京 早雲座)された際の狂言本に拠ると、五百機懐妊の設定はなく、挿絵では五百機役の女方霧波滝江が、腹ではなく喉を鎌で突いており、原作の「左鎌」の趣向が改変されている。このような例からも、女方が腹を切る演技は避けられがちであったことがうかがえよう。

(19) 松崎仁氏「異見事考」(『元禄演劇研究』昭和五十四年)。

(20) 祐田善雄氏「近松作の歌舞伎狂言本五種その他」(『ピブリア』十号 昭和三十三年三月)。

(21) 浄瑠璃本を流用した狂言本の当該局面は、若干の省略はあるものの、浄瑠璃とはほぼ同じである。

(22) 土田衛氏編『上方狂言本 七』解題参照。

(23) 「津川殿が京で去顔みせに。丹波与作のお乳の人にてあてられしに。又あやめ殿せられたれ共。かへつて津川殿程にないと申た。」

(24) 『女腹切』では、他に、お花を偽叔母と察した刀屋の主人に半七が打擲される局面(上巻)や、半七の刀すりかえを叔母が察した局面(下巻)などに叔母の衝撃や立腹のさまが描かれている。このような局面については、注(4)の須山氏論文において詳しく分析されている。

(25) 『結御神』の狂言本は、原作『小室節』を流用しつつ、お家騒動物化にあたっての改変を加えたものである(松崎仁氏「浄瑠璃の歌舞伎化」『元禄演劇研究』所収 参照。)が、少なくとも滋野井と三吉が絡む局面については、原作とはほぼ同じであったと推測される。

(26) 従来、近松が浄瑠璃に役者の死を当て込んだことを指摘されている役者は、初代中村七三郎、二代目嵐三右衛門、大和屋甚兵衛など、いずれも、座本、またはそれに近い役割を果たし、常に座の筆頭に位置するような人気役者である。

各役者の死を当て込んだ近松浄瑠璃については、信多純一氏『傾城反魂香』試論（『近松の世界』平成三年）、山田和人氏『雪女五枚羽子板』の成立について——二世三右衛門の芸風とその追善を中心に——（『同志社国文学』十五号）、井上勝志氏『傾城吉岡染』成立考——宝永七年上演の意味——（『文学史研究』三十二号）参照。

* 主要引用本文

近松浄瑠璃——岩波版『近松全集』に拠るが、適宜漢字をあてた。

役者評判記——『歌舞伎評判記集成』第一期（岩波書店）に拠る。ただし、『役者胎内搜』京の巻については、『演劇研究』十
四号所収「秋葉家本宝永六年三月「役者胎内搜」（京）」（高橋比呂子氏 鳥越文蔵氏翻刻）に拠る。

『鸚鵡籠中記』——『名古屋叢書統編』第十一巻に拠る。

〔付記〕本稿は、去る平成四年度大坂大学国語国文学会総会（一九九三年一月十五日）での口頭発表に補訂を加えたものである。発表後の四年間、半太夫の死と『女腹切』を結び付ける確証は求め得なかったが、発表内容に補訂を加え、仮説として提示し、大方の御教示を仰ぐことにした。発表の席上、並びに発表後御教示賜った諸先生方に改めて深謝申し上げます。

（大学院後期課程学生）